此建議ハ十一月廿六日決議セルモノニシテ當日ノ出席議員ハ四十七名ニシテ丁度赤穗義士ト同數ナリ、而シテ反對者十七名ナリキ。斯ノ如ク年々縣會ヨリ建議アリ縣下ノ處々ニ於テハ有志及青年等奮然起ツテ知事ノ處置ニ對抗シ演說會ヲ催シテ氣勢ヲ擧ゲ猛然タル反對運動ヲナシタル爲佐藤知事モ遂ニ默過スルコト能ハス二十三年三月三十一日付ヲ以テ新町、安中町、妙義町、此三ケ所ノ貸座敷廢止ノ縣令ヲ出スニ至レリ。

群馬縣令第二十一號

明治二十一年五月群馬縣令第三十二號ヲ以テ貸座敷營業及娼妓稼廢止ノ儀ハ當分ノ內延期スヘキ旨布令置候處詮議ノ次第有之左ノ場所ハ本年九月三十日限廢止ス。

但貸座敷營業者ノ內他ノ營業ニ就クコト能ハサル事情アルモノニシテ貸座敷所在地ニ轉居繼續營業ヲ爲サムトスルモノニ限リ特ニ允許ヲ與フルコトアルヘシ。

一、綠野郡新町

一、碓氷郡安中町

一、北甘樂郡妙義町

明治二十三年三月三十一日

知事不信任決議ト縣會ノ解散知事ノ交迭

群馬縣知事　佐藤與三

當時勿論存娼論者モ相當アリシコトトテ急激ニ全部ヲ廢止スルコトハ營業者ノ困難ト廢止後ノ弊害等ヲ慮リ漸進主義ヲ取ツテ一部ノ廢止ヲ行ヒタルモノト考ヘラルルモ廢娼論者ノ側ニアリテハ此ノ佐藤知事ノ處置ヲ奇怪千萬ナリトシテ同年十二月十七日ノ縣會ニ於テ佐藤知事ノ不信任ヲ唱ヘ遂ニ辭職勸告ヲ決議シ委員十名ハ翌十八日佐藤知事ヲ自邸ノ病床ニ訪ヒ辭職ヲ勸告シタリ。勿論知事ハ之ヲ拒絕シタルモ其勸告ノ理由トシテ廢娼問題ノ外種々ノ批政ヲ擧ゲ居レリ。而シテ此當日即チ二十三年十二月十八日縣會ハ中止ヲ命セラレ廿四日再會セラレタルカ廿九日再ヒ中止ヲ命セラレ遂ニ翌年一月一日內務大臣ヨリ縣會ノ解散ヲ命セラルルニ至レリ。

此明治二十三年十二月廿九日即チ第二回目ノ縣會中止セラレタル日ノ縣會ニ於テ病氣缺勤中ノ知事及內務部長ニ無理ニモ縣會ヘ出席ヲ求ムルノ動議成立シタリ其時出席ヲ求ムルノ可否採決ニ於テハ否トスル者僅カニ九名ニシテ又議員ノ質問中、『知事ハ病氣ト云フカ眞ノ病氣カ』等ノ言アリ之ニ對スル番外參事官ノ答辯ハ處女ノ如キモノアリシヲ見ル。

知事ノ交迭ト新任知事ノ廢止縣令ノ發布

斯ノ如キ知事ト議員トノ極端ナル衝突ハ附和雷同シ易キ國民性ニ依テ益々盛ントナリ其ノ人格破壞的ノ氣分ハ知事ノ身邊ニ迄種々ノ流說ヲ以テ攻擊ヲ加フルニ至レリ現時ニ至リテモ奇怪ナル說ヲナスモノノアルノニ依ツテモ當時ノ模樣ヲ窺知シ得ラルルナリ其結果ハ遂ニ二十四年四月九日佐藤知事ハ

非職トナリ大藏省主税局長中村元雄氏知事ニ任セラル中村知事ハ赴任後廢娼ヲ實行セサルヘカラサルノ形勢ヲ觀取シ其年九月十二日縣令第三十九號ヲ以テ明治二十六年十二月三十一日限リ貸座敷廢止ノ旨ヲ發布シタリ。

群馬縣令第三十九號

明治二十一年五月二十六日縣令第三十二號ハ來ル明治二十六年十二月三十一日限リ之ヲ廢ス。

明治二十四年九月十二日　群馬縣知事　中村元雄

即チ明治十五年四月十四日付明治二十一年六月限リ貸座敷廢止ノ楫取知事ノ布達ハ佐藤知事ニ依テ明治二十一年五月廿六日付縣令ヲ以テ無期延期セラレ此佐藤知事ノ縣令ハ更ニ中村知事ニ依ツテ二十六年十二月三十一日限リ廢止セラレ此ニ全ク廢娼ノ事實ヲ現ハシ、斯クシテ廢娼運動第二期終リヲ告ケタリ。

サレト此廢止問題ハ其當時ニ於テハ贊否兩方共運動ハ却々盛ニシテ迂餘曲折モ多ク存娼側ノ運動モ激シク時ニハ不穩ノ擧動ニモ及ハムトシタルコトモアリタリ。サレハ廢娼實行後ニ於テモ全然平靜ニ復セス明治四十一年頃迄モ存娼運動ハ時ニ擡頭シタルコトアリシカ就中明治三十一年ノ貸座敷營業地指定ノ縣令ト四十一年前橋、高崎、兩市會ノ公娼設置ノ決議ハ最モ著シキ事實ナリ。

第三節　公娼設置ノ再燃ト知事ノ交迭

中村知事後ニ阿部浩、石坂昌孝、古莊嘉門等ノ知事時代ニ於テハ特筆スヘキ事件モ發生セスシテ經過セルモ草刈親明知事カ明治三十一年七月赴任セラレ同年十一月十八日縣令第五十一號ヲ以テ前橋市、高崎市、一ノ宮町、桐生町、館林町、沼田町ノ七ヶ所ヘ貸座敷營業地ヲ指定シタルコトアリ之カタメ縣下ノ物議ヲ生シ有志家ノ激シキ攻擊起リ知事ハ縣令發布後五日目即チ十一月廿二日免官トナリ古莊嘉門氏カ知事トシテ第二回目ノ赴任アリ同月廿四日縣令第五十二號ヲ以テ先キノ草刈知事ノ貸座敷營業地指定ノ縣令ハ忽チ取消サレ丁度指定ノ縣令發布後七日目ニ取消ノ縣令ヲ發布セラレタルモノナリス之ハ内務大臣ヨリ取消スヘク訓令セラレタリトノコトナルモ遂ニ其文書ヲ見ルコトヲ得サリシ。

公娼存置ノ餘焔ハ容易ニ止マス其後明治四十一年十月前橋市會ハ五對十五ノ多數ヲ以テ公娼設置意見書ヲ決議シテ知事ニ提出シ高崎市會モ又同樣ノ決議ヲナシ沼田町ニテモ町長ニ建議ヲシタル者アリ斯樣ニ公娼設置運動カ擡頭スルヤ否ヤ一方廢娼側ニ於テハ群馬青年會カ中心トナリ各地ノ青年會ヤ婦人矯風會ノ連中ト氣脈ヲ通シ各地ヲ遊説シ大會演説會等ヲ催シ或ハ當局ニ陳情スル等盛ナル運動ヲ起シ斯樣ナ工合テ何時モ存娼論者ニ餘裕アラシメス十數年間ノ戰鬪ヲ續ケテ遂ニ今日ノ吾國唯一ツノ廢娼縣トナリタルモノナリ。而シテ此廢娼ノ結果トシテ群馬縣ハ何物ヲ得タルカ之レ深ク研究スヘキ問

題ナリ。

尙ホ最後ニ一言スヘキハ群馬縣ハ現在吾國ニ於ケル唯一ツノ廢娼縣ナルモ實ハ埼玉縣ニ於テハ已ニ明治六七年頃廢娼ヲ斷行シタルモノナリ當時ノ埼玉縣令ニ白根多助ト云フ人ニシテ、現在ハ埼玉縣ノ本庄深谷ニ貸座敷アルモ埼玉縣カ廢娼ヲ斷行セル當時ハ本庄、深谷ハ熊谷縣（今ノ群馬縣ノ前身）ニ屬シ熊谷縣ヲ群馬縣ト改ムルニ當リ埼玉縣ニ移管シタルカ故ニ群馬縣ノ廢娼當時ニ於テモ本庄深谷ハ取リ殘サレ今ニ公娼ノ存置ヲ見ルカ如キ現象トナレルモ實ハ廢娼ノ先驅ハ埼玉縣ナリト云フ。

第二章　群馬縣ノ私娼ニ關スル沿革及現況

第一節　公娼設置後ノ賣淫取締

幕府時代ヨリ明治初年ニ於テハ飯盛ト稱スル街道筋ノ宿場ニ於ケル私娼及酌婦、舞子ト稱スル者等カ密娼ヲ營ミシカ明治九年一月一日娼妓貸座敷ヲ公許スルト同時ニ酌婦舞子ノ體裁ヲ爲シ客ニ接スルヲ禁シ同三月九日賣淫取締規則ヲ初メテ制定發布セリ歷史的ニ參考トシテ當時ノ規則ヲ次ニ掲ケム。

本縣第二十九號賣淫取締規則ノ發布ト同規則

賣淫取締規則別記ノ通定メ候條區戸長ニ於テ每戸無洩懇切ニ諭告シ心得違ノ者無之樣可致此段相達候也。

賣淫取締規則

第一條　凡ソ縣ノ聽許ヲ得スシテ賣淫スル者及媒合容止スル者ハ初犯ハ七圓ヨリ多カラス三圓ヨリ少カラス再犯以上ハ十圓ヨリ多カラス七圓五十錢ヨリ少カラサル罰金ヲ科ス其窩主初犯ハ十圓ヨリ多カラス五圓ヨリ少カラス再犯以上ハ拾五圓ヨリ多カラス拾圓五拾錢ヨリ少カラサル罰金ヲ科ス。

若シ父母等ノ指令ニ係ル者ハ罪其指令者ヲ坐ス。

第二條　若シ無力ニシテ罰金ヲ收ムル能ハサル者ハ賣淫者及媒合容止スル者初犯者二ケ月ヨリ多カラス一ケ月ヨリ少カラス、再犯以上ハ三ケ月半ヨリ多カラス二ケ月半ヨリ少カラス窩主初犯ハ三ケ月ヨリ少カラス四ケ月半ヨリ多カラス再犯以上ハ五ケ月ヨリ多カラス四ケ月半ヨリ少カラサル日數懲治監內ニ於テ苦役スルノ罰ニ處ス。

第三條　賣淫ノ罰ヲ受ケシ者貧困ニシテ自立スル能ハサル者ハ授產場ニ入レ工藝ヲ授ケ其ノ工事ニ習熟シ工錢ノ貯蓄アリテ就產ノ目途アルカ或ハ人ニ嫁スル等ノ類ハ其親戚又ハ地主、家主、所役人等ノ保證ヲ得テ之ヲ允ルス。

第四條　右ノモノ猶賣淫スルニ於テハ三圓ヨリ多カラス一圓五拾錢ヨリ少カラサル罰金ヲ保證人ニ

科ス。

第五條　寄留ノ者賣淫ノ罪ヲ犯セシ時ハ其親戚又ハ雇主戸主或ハ所役人ヘ責付シ本籍ヘ送還セシム

第六條　賣淫ニ類スル猥褻ノ現跡ヲ認ムルニ三度ニ至ル者ハ總テ此規則ニ照シ處置ス。

第七條　右ノ罰金ハ之レヲ縣廳ニ貯蓄シ授産場ノ資用ニ充ツ。

右之趣每戸無洩可通達者也

明治九年三月九日

熊谷縣權令　楫取素彦

各區正副區戸長中

右ノ規則發布後約一ケ月ニシテ同年四月十四日何故カ第七條ヲ削除セリ又昔ノ處罰ハ重カリシナリ而シテ此規則中第三條ニ貧困者ノ賣淫者ハ授産場ニ容レテ一定職業ヲ授ケルト云フコトヲ規定シタルハ今日ヨリ見レバ社會施設上宜シキコトノ樣ニ思ルヽモ一面ヨリ考フルト日本ノ賣淫婦中眞ニ貧困ノタメニ之ヲ爲シ一定ノ職業ヲ授ケラレ其ノタメニ賣淫ヲ避ケ得ラルヽナラハ如何ナル勞苦モ厭ハズト云フ者若ハ之ヲ續ケラルヽ者幾何在リヤ可ナリ考究ヲ要スルコトナリ。又斯ル社會的施設ハ其ノ方法宜キヲ得ヌト其目的ヲ達スルコト極メテ困難ナルコトト考ヘラル果シテ然ルカ否カ如何ナル事情ニ依リシカ不明ナルモ其後同年十二月二十八日規則ヲ改正シテ四ケ條ニ改メ右ノ第三條及第四條ノ規定ハ削除シ第五條第六條ヲ第三條第四條ニ改メ明治十二年五月其ノ第四條ヲ削除スルニ至リシカ其後明治十七年二月ニ密賣淫處分規則ト改定セラレタリ。

飲食店取線規則ノ發布ト其ノ概要

一面ニハ明治十七年九月十三日飲食店取締規則ヲ制定セリ之レ現在ノ同規則ノ濫觴ナルカ故ニ其ノ當時ノ規定ノ要點ヲ記スヘシ。

一、飲食店トハ料理屋其他飲食物ヲ來客ニ供シ營業トスルモノヲ總稱ス。

二、來客又ハ藝妓ヲ止宿セシムルコトヲ得ス若シ來客ヲ止ムヲ得ス止宿セシムルトキハ即時屆出ルコト。

三、雇女又ハ酌婦ヲシテ歌舞音曲等藝妓ニ紛ハシキコトヲ爲サシメサルコト。

四、夜十二時ヲ過クルトキハ來客ノ需アルモ藝妓ヲ招キ又ハ演藝セシメサルコト。

斯ノ如キ規則制定セラレ他方密賣淫處分規則ト相俟テ之カ取締ヲナシタルモノナリ而シテ此飲食店取締規則ハ爾來明治二十四年、二十六年、三十三年、三十八年、四十一年、大正三年、四年ノ七回ニ改正ヲ行ヒ現行ノ飲食店貸席取締規則トナリシモノナリ後ノ參考ノタメ此ニ現行規則ヲ拔記セン。

現行飲食店貸席取締規則

第一條　本則ニ於テ飲食店ト稱スルハ料理店、飲食店、銘酒屋、其ノ他貸席ヲ設ケテ飲食物ヲ供シ貸席ト稱スルハ待合茶屋、遊船宿其他貸席ヲナス職業ヲ云フ。

第五條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ本則ノ營業ヲ許可セス。

一、猥褻、姦淫ニ關スル罰ヲ犯シ改悛ノ情ナシト認ムル者。

二、公安又ハ風俗ヲ害スル虞アリト認ムル者。

三、營業許可ヲ取消サレタル後滿二ケ年ヲ經過セサル者。

第七條　營業者ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ所轄警察署ニ於テ營業ヲ停止シ又ハ許可ヲ取消スコトアル可シ。

一、第五條第一號第二號ノ事實生シタルトキ。

二、一ケ年二回以上本則ニ依リ處罰セラレタルトキ。

第十四條　營業者ハ左ノ各號ヲ遵守スヘシ。

一、來客ヨリ衣服其他ノ物品ヲ酒食料席料等ノ低償トシテ受領シ又ハ其質入賣却等ノ依頼ニ應セサルコト但シ警察官ノ承認ヲ受ケタルトキハ此限リニ在ラス。

二、來客藝妓及藝人ヲ宿泊セシメサルコト但シ止ムヲ得サル場合ハ警察官ノ承認ヲ受クヘシ。

三、客引ヲ出シ若クハ飲食遊興ヲ勸誘シ又ハ來客ノ要求セサル飲食物ヲ供スヘカラサルコト。

四、來客ニ面會ヲ求ムル者アルトキハ之ヲ拒ミ又ハ隱蔽スヘカラサルコト。

第十五條　營業者婦女ヲ雇入（俗ニ云フ目見ヘ又ハ試ミヲ含ム）レタルトキハ三日以内ニ左ノ事項ヲ具シ所轄警察官署ニ届出ツヘシ其解雇シタルトキ亦同シ。

一、雇入目的（酌婦又ハ炊事ニ使用ス等ノ區別）

二、族籍、住所、氏名、年齢

三、未成年者ハ親權ヲ行フ父又ハ母若クハ後見人有夫ノ婦ハ夫ノ承諾書。

家族ノ婦女ヲ客席ニ出サントスルトキ亦前項ニ同シ。

第十六條　警察官署ハ密賣淫又ハ媒合容止若ハ猥褻行爲ニ依リ處罰セラレ又ハ風俗ヲ紊ル虞アリト認メタル婦女ヲ客席ニ出スコトヲ禁シ又ハ解雇ヲ命スル事アルヘシ。

第十七條　營業者ハ左ニ掲クル疾患アル者ヲシテ飲食物若ハ其容器ノ取扱ヲ爲サシメ又ハ其取扱ヲ爲ス場所ニ立入ラシムルコトヲ得ス營業者自ラ其疾患アルトキハ之ニ準ス。

一、肺結核病。

二、癩病。

三、黴毒。

四、疥癬。

五、其ノ他傳染性疾患アル者。

第十八條　營業者ハ家族ノ婦女又ハ雇婦女ヲシテ左ノ行爲ヲナサシムルコトヲ得ス。

一、店頭其他通行人ノ目ニ觸レ易キ場所ニ座列停立又ハ彷徨スルコト。
二、來客ヲ家外ニ送迎シ又ハ來客ニ隨伴シテ外出スルコト。
三、客席ニ於テ歌舞音曲ヲ爲スコト。
四、猥褻ノ行爲ヲ爲スコト。

營業者婦女ナルトキハ前各項ノ行爲ヲナスコトヲ得ス。

第十九條　午後十二時後歌舞音曲其他喧噪ニ渉ルコトヲ爲サシム可ラス制止シテ肯セサル者アルトキハ警察官ニ屆出ツヘシ。

第二十條　來客アルトキハ門戸ニ鎖鑰ヲ施スヘカラス。

第二十四條　第二條第四條第八條第十一條第十二條第十四條第十五條第十七條乃至第二十一條ニ違背シタル者第十六條ノ處分ニ應セス又ハ停止處分中營業ヲ爲シタル者及第二十二條ノ命令ニ從ハサル者ハ拘留又ハ科料ニ處ス。

第十八條ノ行爲ヲ爲シタル婦女ハ拘留又ハ科料ニ處ス。

藝妓取締規則

藝妓取締規則ニ於テハ明治八年以後大正四年八月迄ニ十七回ノ改正ニ依リ現行ノ藝妓取締規則トナレリ之等ノ詳シキコトハ省略シ此ニハ公娼廢止後ノ私娼及其取締ノ狀況ニ就テ述フヘシ。

第二節　公娼廢止後ノ私娼

明治二十六年十二月三十一日限リ娼妓廢止セラル、ヤ其ノ後ニ於ケル私娼ノ模樣如何其眞相コソ私ノ最モ知ラムト欲スル處ニシテ其當時ノ具體的ノ眞相ヲ知ルコトヲ得ハ多大ノ參考タルヘシト信スルモ現今ニテハ其狀況ヲ確信スル丈ノ具體的ノ事實ヲ蒐集スルコト能ハサルナリ誠ニ遺憾ナリ。現今ニ於テ當時ノ模樣ヲ尋ヌルニ廢止論者側ニ於テハ其後當分ハ密娼モ少ク成績モ良好ナリシト云ヒ、存娼論者側ハ廢娼後ハ密娼擡頭シ風俗上ノ弊害ト衛生ノ害毒ハ漸次多キヲ加ヘタルノ事實ハ確認セラレタリト云ヒ雙方ノ說相反セリ余察スルニ之レハ雙方ノ言フ所事實ニシテ恐テク廢娼後ノ當分ハ廢娼論者ノ言ノ如ク密娼モ少ク成績良好ナリシナラン而シテ年月ト共ニ存娼論者ノ云フ如ク密娼ノ繁榮ヲ來シタルカ如シ之或ハ自然ノ趨勢ナラムカ其後明治三十一年ト四十一年トニ於テ存娼說ノ擡頭ヲ見タルモ反對運動ノ實現スルニ致ラサリシカ而カモ私娼ハ驅逐スヘクモアラス明治四十一年ニ至リテハ自然ノ必要ヨリ却テ取締ヲ寛大ニシ濫リニ一般警察官ヲシテ彼等ノ營業所ニ臨檢セシメサル方針ヲ取リタル爲メ益々密娼(酌婦)ノ跋扈ヲ來シ蕎麥屋、飲食店等彼等ノ巢窟ハ所々ニ散在增加スルニ至レリ此ニ於テカ此儘放任シテハ益々弊害ノ多カラムコトヲ恐レ大正元年九月料理店、飲食店及藝妓取締內規ヲ定メ制限默認主義トモ云フヘキカ一定ノ取締ノ下ニ賣淫行爲ヲ默認スルコト、ナシ場所ヲ制限シ概ネ一

定ノ區域ニ集合セシメ同月三十一日現在數ヲ基礎トシテ濫ニ增加セシメヌ方針ヲ取リ酌婦ハ一ケ月三回藝妓ハ一回ノ健康診斷ヲ行ハシメ酌婦ニ對シテハ主トシテ外部ノ取締ヲナシ賣淫行爲ヲ默認スルニ至レリ同年八月三十日定メタル取締及內規ノ要點ハ次ノ如シ。

取締方針ノ要旨

藝妓酌婦ニ對スル風俗取締ニ關シテハ徒ニ內部ノ微細ナル隱行ヲ發カシムルヨリハ寧ロ外部ニ現レタル事實ヲ嚴密ニ取締リ之等婦女ヲ保護シ取締ノ運用ヲ巧妙ニシ衞生風俗相俟テ取締ノ目的ヲ達セムトスルニアリ。

取締內規ノ要點

前揭ノ飲食店貸席取締規則ニ於ケル料理店飲食店ノ區別ハ客席ニ於テ酒間ノ斡旋ヲ爲サシムルニ主トシテ藝妓ヲ用ユルモノハ甲種料理店、藝妓ニアラサル婦女ヲ用ユルモノハ乙種料理店、婦女ヲ用ヒサルモノハ飲食店トス、ト云フコトトシ普通ノ料理屋ハ其ノ大小ニ區別ナク甲種トシテ此ニハ藝妓カ出入シ此甲種料理店ト雖モ雇女カ絕無テハナク家ノ大小ニ應シ必要數ノ婦女ヲ使用シ居レルモ客席ニ於ケル酒間ノ斡旋ハ主トシテ藝妓ヲシテ之ニ當ラシム、反之魔性ノ婦女ヲ置キ酒間ノ斡旋ノミナラス寧ロ主トシテ客ノ性慾ヲ滿足セシムルヲ目的トスルモノヲ乙種トナセリ即チ酒間ノ斡旋ヲ爲サシムルニ藝妓ニアラサル婦女ヲ用ユルモノハ乙種料理店ト、極メテ婉曲ナル語ヲ用ヰアレトモ實際ハ酒間ノ斡旋ヲ目的トスルニアラサルコトハ自他共ニ之ヲ許シアリ。之ヲ露骨ニ云ヘハ此ノ乙種料理店ナルモノ實質ハ所謂女郎屋ナリ。飲食店ハ酒間ノ斡旋ニ婦女ヲ用ヒナイモノトナツテ居ル、乍併飲食店、貸席規則ニ於ケル表面ノ規定ハ甲種乙種ノ區別ハナク又乙種料理店ニ於ケル賣淫行爲ハ默許セラレテ居ルモ來客ヲ宿泊セシメサルコトハ取締規則ニ規定シテアリ、若シ來客ニ枕床ヲ用ヒテ宿泊セシメタルモノニ對シテハ體刑ニ處スベク內規ニ定メアリテ之等ハ甲種料理店ト同樣ナリ要スルニ乙種料理店ニ於ケル賣淫ハ默許サレテ居ルカ客ノ宿泊ヲ許ササルモノトス、此ノ客ヲ宿泊セシメヌト云フコトハ參考トシテ研究スヘキコトニシテ一客ノ時間ノ短イコトカ花柳病豫防上何等カ役立タセルコトナキヤトモ考ヘラレル但現在ノ實狀ニ於テハ客ヲ宿泊セシメヌコトハ勵行サレテハ居ラヌ樣ナリ。

尙ホ乙種料理店ノ婦女ニシテ來客ヲ屋外ニ送迎シ又ハ來客ヲ隨伴シテ外出シ或ハ飲食遊興ヲ勸誘シタル者ハ直ニ解雇ヲ命スヘキ規定アリ。

場所其他ノ制限

甲種料理店ハ公務所（吏員三名以下ノ公務所ヲ除ク）學校又ハ感化院ヨリ容易ニ望見シ又ハ音曲ノ容易ニ達シ得ヘキ場所ニ許可セサルコト。

乙種料理店及藝妓營業ハ前記甲種料理店ニ對スル制限ノ外ニ國道、縣道及市町村樞要ノ幹線道路ニ沿ヒ又ハ其道路上ヨリ容易ニ望見シ得ヘキ場行ニハ許可セサル方針ヲ採リツヽアリ而シテ乙種料理店

ニハ宿屋兼業ヲ許サヌコトニナツテ居ル但シ全然別物デアルカ又出入口ヲ異ニシ内部ノ交通カ出來ナイ設備ナレハ許可シテ可ナリトシアリ但シ土地ノ狀況ニヨリ他ニ適當ノ宿屋營業者ナク然カモ全然建物ヲ區別シ難キ特別ノ事情ニアル場合ハ此限ニアラストナシアルモ現今此特例ニ依ルモノハ少數ナリ。

乙種料理店及酌婦數ノ制限

大正元年八月三十一日調査ノ乙種料理店及酌婦ノ現在數ヲ基礎トシテ同年九月十八日各市町村内ニ於ケル數ヲ指定シ特別ノ事情ニヨリテ指揮ヲ受クルニアラサレハ此指定數ヲ超過シテ許可スルヲ得サルコトトシ之レカ許可ハ警察署長ノ權限ニ屬セシメアリ而シテ大正元年ノ指定數ハ當時二市十一郡二百六町村中指定セル個所ハ二市八十七町村ニシテ乙種料理店ノ數五百九戸酌婦千百二十一人ヲ算シタリ將來特別ノ場合指揮ヲ受クルニアラサレハ此指定數ヲ超エテ許可スルコト能ハス尚ホ詳言スレハ乙種料理店ノ數ハ各市町村ノ指定ノ數ヲ限度トシ之ヲ超過セサル場合ノ外新ニ許可セサルコト。例ヘ指定ノ限度内ト雖モ現ニ之ナキ部落ニ新ニ營業ヲ許可スヘカラスト定メ酌婦ノ數ハ每市町村ニ對スル指定數ノ範圍内ニ於テ各營業者ト營業狀態及客室ノ廣狹等ヲ斟酌シ營業者每ニ適當ノ酌婦數ヲ指定スヘシ但シ四十歳未滿ノ酌婦ハ專用室三坪ニ付一人ヲ超エス又一戸ニ付市ニ在リテハ十人町ニ在リテハ五人、村ニ在リテハ三人以内ニ於テ指定スルコトト定メアリ。併シ大正元年ノ實施當初ニ於テハ一人三坪ノ制限ニ觸レサル限ハ八月三十一日現在調ヘ當時ノ數ヨリ減少セス若シ右ノ制限ニ觸ルヽモノト雖一ケ年間ハ之ヲ認メタリ。

右樣ノ内規制限ヲ以テ取締レリ其後大正二年、四年、十二年增員ヲ許可セルモ主トシテ市部ニ限定セリ現在ノ指定數ハ營業者五百十六戸酌婦千四百九人ナルモ大正十三年九月十日ノ現在調ニ依ルト市町村ノ數六十八、乙種料理店數三百七十七戸酌婦ノ數八百四十名ニシテ指定ノ數ヨリ非常ニ減少シテ居リマス（卷末附錄第十八表參照）

序ニ年齡ノ制限ニ就テ言ハヽ藝妓ハ滿十二歳以上乙種料理店ニ於テ使用スル酌婦ハ滿十六歳以上ニアラサレハ許可サルコトトシアリ。

健康診斷ニ關スル内規

大正元年乙種料理店ヲ區別シ彼等ノ賣淫行爲ヲ默認スルヤ營業主ヲシテ共同セシメ自衞上每月三回酌婦ノ健康診斷ヲ施行セシメ有病者ハ休業治療ヲ行ハシム、現在ニ於テハ高崎市及前橋市ハ每月四回宛行ヒ又各所共每回局部ノ檢査ヲ實行シ居レリ最モ高崎市ハ明治三十八年ヨリ前橋市ハ四十二年ヨリ健康診斷ヲ實施セルモ當時ハ其回數少カリシ。尚治療ニ關シテハ高崎市、前橋市、館林町、伊勢崎町、金子町、倉賀野町ノ六ケ所ニ於テハ一定ノ治療所ニ收容シツヽアリ而シテ之等檢診料及治療費用ハ抱主ノ負擔ナリ。

検診治療醫ハ警察部長ノ指揮ヲ受ケテ指定シタルモノヲシテ施行セシムルコトニ定メラレ、而シテ豫メ各地ノ乙種料理店組合又ハ組合ナキ所ハ營業者總代ヲ以テ酌婦ノ健康上毎月三回醫師ノ診斷ヲ受ケシメ有病者ニハ治療セシメ度ニ付相當ノ醫師御指定相願度醫師ノ診斷治療ニ關シテハ警察醫診指揮監督ヲ仰度云々ノ意味ノ願書ヲ提出セシメアリテ現在四十八名ノ健康診斷醫指定セラル。

藝妓ノ健康診斷醫ニ付テハ藝妓ニシテ傳染性疾患アリト認ムル者ニ對シテハ醫師ヲ指定シ健康診斷書ヲ徵シ疾患アル者ニハ治療ヲ命スヘシ云々トアルモ實際ニ於テハ毎月一回宛指定醫ノ許ニ健康診斷ヲ受ケツヽアリ。然レトモ之レハ酌婦ノ如ク正確ナラス局部檢診ニ付テモ隨分疑ハツキモノアル如ク思ハレル此藝妓ノ檢診醫ハ現在縣下ニ三十七名アリ。

藝妓及酌婦ノ健康診斷ノ成績ハ毎月分ヲ翌月五日限リ診斷醫ヨリ報告セシムルコトニ規定セラル。

健康診斷ノ成績ハ稿ヲ改メ述フル處アラン。

第三節　藝妓及乙種料理店ノ消長

明治二十九年ヨリ大正十二年迄各年末現在數ヲ比較スルニ左表ノ如ク藝妓ニ於テハ其實數及人口ニ對スル割合共ニ近年著シキ增加ヲ見酌婦ニ於テ反對ニ漸次減少ノ傾向ヲ示セリ即チ大正十二年ニ比較スルニ藝妓ハ其實數約二倍弱人口一萬ニ對スル比例ニ於テ七割强ノ增加ニシテ酌婦ハ反之其實數ニ於テ約三分、人口比例ニ於テ約一割ノ減少ナリ而シテ乙種料理店酌婦ノ數ハ年々八百乃至千二百人內外ナリ、存娼當時ニ於ケル娼妓ノ數ハ大約五百乃至七百人內外ニシテ其數ニ於テ可ナリ大ナル相違アルコト左記第六十三表及第六十四表ノ如シ。人口ノ增加ニ伴ヒ之等賣笑婦ノ增加ハ自然ノ趨勢ナルヘシ

上雖モ群馬縣ハ少數ノ公娼ヲ廢シ多數ノ私娼ヲ得タルノ感ナキニアラス。

六三、累年娼妓一日平均人員比較　群馬縣

年次	一日平均娼妓數	備考
自明治十五年七月至同十六年六月	七七九	明治十六年六月限リ伊香保貸座敷廢止
自同十六年七月至同十七年六月	七四三	
自同十七年七月至同十八年六月	五三五	
自同十八年七月至同十九年十二月	四一三	
自同十九年一月至同二十年十二月	三六六	
自同二十年一月至同二十一年十二月	三四四	
自同二十一年一月至同二十二年十二月	三五〇	
自同二十二年一月至同	三七六	

六四、藝妓、酌婦數累年比較　群馬縣

年次	一日平均娼妓數	備考
自明治二十三年一月至同十二月	三八八	明治二十三年九月限リ安中町妙義町新町貸座敷廢止
自至二十四年	一六七	

年次	現住人口	藝妓 實數	藝妓 人口一萬ニ付	乙種料理店酌婦 實數	乙種料理店酌婦 人口一萬ニ付
明治二十九年	八〇〇、八〇七	五七五	七、一八	八七四	一〇、九一
同三十年	八〇四、九六八	五七三	七、一三	九三八	一一、六五
同三十一年	八二五、七一三	六四一	七、六七	一一三六	一三、六四
同三十二年	八四二、六九六	五七六	六、八四	一一三三	一五、一二
同三十三年	四六〇、四〇一	六三三	七、五九	一一二四	一三、六四
同三十四年	八七一、八四八	六六六	七、二九	一〇五五	一三、三三
同三十五年	八八七、八七八	六一七	六、九五	一一八一	一三、三〇
同三十六年	九〇一、一三一	六二四	七、〇四	一一四〇	一三、六五
同三十七年	九〇一、二六七	五三三	五、九一	一一三〇	一三、四四
同三十八年	九一五、七四〇	四六九	四、六八	一一五五	一二、八三
同三十九年	九三一、二六五	四二四	四、五四	一一八五	一二、七〇
同四十年	九四五、七三六	四三四	四、一八	一一三二	一一、八六
同四十一年	九五八、〇五四	四八〇	五、〇一	一〇九一	一一、三九
同四十二年	九六六、四〇九	四六二	四、七八	九九三	一〇、二八
同四十三年	九八八、二四一	五四一	五、七四	八四〇	八、四〇
同四十四年	九九五、五五三	五四八	五、四八	九〇八	九、一三
同四十五年	一〇〇二、六四八	五三五	五、三二	七九八	七、九二
大正二年	一〇一二、八八四	六五四	六、四二	九〇三	八、八六
同三年	一〇二一、六九八	六九五	六、一三	九四七	九、一七
同四年	一〇三一、二七九	七一七	六、八六	七〇五	六、九五
同五年	一〇四〇、八九三	七六六	七、三三	九五〇	八、九五
同六年	一〇四〇、二三九	八〇七	七、四〇	五〇八	八、四一
同七年	一〇三九、三六三	一〇〇二	九、二七	九三一	九、二五
同八年	一〇九二、八〇一	一一一八七	一〇、八五	九五三	八、七一
同九年	一一〇一、一〇四	一一四二	一〇、三五	九〇〇	八、一七
同十年	一一三一、二五七	一一二七	一一、〇一	八五七	七、六四
同十一年	一一四一、二〇〇	一一〇九	一一、一七	八五一	七、八六
同十二年	一〇九六、五〇〇	一一〇七	一一、〇一	八八九	八、一二

第四節　酌婦ノ身分關係

酌婦ノ年齡、前借金、契約、年期、勤續年期、學歷、前職業及酌婦ノ收入負擔等ノ概略ヲ參考ニ述フヘシ。

年齢

年齢ニ於テハ大正十三年九月十日ノ現在人員八百四十名ニ就キ調査スルニ十七歳ヨリ四十歳（數ヘ年）迄ノ間ニシテ十八歳ノ七十七人ヲ最多トシ之ニ次テハ二十二歳ヨリ二十八歳迄ノ年齢階級ノ者多ク五十三人以上六十九人ヲ有シ總數八百四十人中ノ四百三十九人ヲ占ム其他二十一歳二十二歳十九歳十七歳等多シ之ヲ要スルニ二十八歳以前ノ者多ク八百四十人中六百七十五人ヲ占ム。

前借金

前借金ナキモノ十二人五十圓以下ノ者十人其他百圓ヨリ最高二千圓迄アリ最モ多キハ三百圓ヨリ八百圓迄ニシテ六百四十六人ヲ占ム。

契約年期及勤續年數

契約年期ナキモノ八百〇四人一年ヨリ六年迄ノ契約年期ヲ有スル者三十六人ナリ。

勤續年數ハ六ケ月以内ノモノヨリ十年以上十五年以内ニ至ルモノアルモ其數概ネ年月ニ反比例セリ左ノ如シ而シテ短日月中ニ移轉スル者多シト云フ。

勤續年月	人員	勤續年月	人員
六ケ月以内	三五二	六ケ年以内	四
一ケ年以内	一七四	七ケ年以内	九
二ケ年以内	一五五	八ケ年以内	一
三ケ年以内	八六	九ケ年以内	一
四ケ年以内	三六	自十年以上至十五年以内	一
五ケ年以内	二一	計	八四〇

學歴

無學ノモノ百三十一人ニシテ全部ノ一五%ニ當リ尋常小學卒業以上ノ者二百八十七人ニシテ全數ノ三四、%ニ當リ其内高等女學校卒業一人中途退學四人アリ尋常小學中途退學四百二十二人ニシテ全數ノ五〇、〇%ニ當レリ。

前職業

從前酌婦タリシ者五百二十人飲食店炊事婦五十人飲食店雇三人旅人宿女中十人等ノ接客婦タリシ者五百八十三人。六九、四%ヲ占ム其他農業九十五人機織工五十人製糸工女三十六人等ヲ多シトシ他ハ各種ノ賃金稼業、小製造業、小商人、職工等ナリトス（以上卷末附錄第十九表至第二十二表參照）

酌婦ノ收入支出抱主負擔概要

前橋市高崎市ニ關スルモノ次ノ如シ

酌婦收入トナルベキモノ　前橋市　高崎市

酌婦料客一人ニ付　八十錢　七十錢

毎月主人ヨリ補助　三圓　月税補トシテ　三圓八十錢

湯錢及結髮料トシテ　同　三圓

酌婦ノ負擔

税金毎月　市税共　九圓九十錢　九圓九十錢

被服料其他日用品料　不定額　不定額

抱主負擔

入院中ノ食費藥價（其他ノ場合ノ藥價モ含ム）

一日〔食費　三十錢　三十錢
　　藥價　二十錢　二十五錢

健康診斷料組合費　組合費　二十五圓　組合費　三十圓

結髮料　一ケ月五回分

其他ノ事情

前橋市

酌婦一ケ月ノ客數ハ平均約二十人位ノ見込ナリ最モ多數ノ者ニテ五十人位ナリ少キハ一ケ月十人内外ノ客ナリト云フ酌婦一人ニテ一ケ月五十圓ノ收入アルハ優良ノ成績ニシテ少數ナリト云フ。

遊興費定額ハ四圓ニシテ、其内譯ハ酒貳本一圓二十錢。肴二品一圓五十錢、口取リ五十錢、酌婦料八拾錢ナリ、遊興時間ハ一客ニ三時間以内ナリ、一夜飲ミ續ケテモ五圓乃至二、三十圓以内ニシテ多額ノ消費者少ク大抵十五圓以内ナリト云フ。

高崎市

一ケ月客數ハ平均酌婦一人ニ對シ約二十五人乃至三十人位ニテ最多ノモノ七十人位最少七、八人ナリト云フ。

遊興費定額ハ三圓五十錢ニシテ内譯口取五十錢、酒壹本五十錢、ビール一本一圓、肴一品八十錢、酌婦七十錢ナリ。

サレト右定額ヲ割引セシムル客少カラス、例ハ二人ニテ五圓トカ六圓トカニ割引セヨト云フモノ、如シ、普通一人ノ消費高三圓乃至五圓ニシテ十圓位ニテ飲ミ明ス者モアリト云フ普通時間ハ二時間ナリ。

以上ハ高崎前橋共普通ノ狀況ヲ記セルモノナレトモ近時酒肴ヲ省略シテ單ニ五十錢位ニテ慾求ヲ滿スモノアルカ如シ之等ハ主トシテ學生、少青年等經濟的自由ヲ有セサル者ニ對シテ組合規約ヲ破リテ廉賣スルモノナリト云フ或ハ然ラム。

第三編　群馬縣下ノ花柳病及他府縣トノ比較

群馬縣ニ於ケル花柳病ノ多少ハ極メテ興味ヲ以テ觀ラレ居レリ之レ同縣カ全國中唯一ノ廢娼縣ナル旨ノ宣傳ニヨリ社會ノ視聽ヲ引キツヽアルカ故ナリ、已ニ或一派ヨリハ群馬縣ハ壯丁ノ花柳病等ハ他府縣ニ比シ少數ニシテ之レ廢娼ノ賜ナリトサヘ宣傳セラル、故ニ群馬縣ニ於ケル花柳病蔓延ノ狀態ヲ詳査スルコトハ徒勞ノコトナラサルヲト信ス。

第一章　群馬縣下賣笑婦ノ花柳病

第一節　娼妓ノ花柳病

先ツ同縣賣笑婦ノ花柳病ノ狀態ヨリ觀察スルニ同縣ニハ已述ノ如ク明治二十六年限リ表面上ノ公娼（私ハ同縣ノ現狀ニ鑑ミ特ニ表面上ト云フ言ヲ用ヒタイノデアル）ヲ廢止シタルモノナルモ存娼時代ノ公娼ノ花柳病ハ左表ノ通リ明治十五年ヨリ二十五年ニ至ル一ケ年間ノ平均患者ハ健康診斷延人員ニ對シ一、五二％ニシテ當時ニ於ケル他府縣ノ娼妓梅毒患者ノ統計ヲ得サリシタメ比較考察スルコト能ハサレトモ敢テ多數ナリト云フ程ニハアラサルヘシト思ハル之レヲ現在ノ同縣乙種料理店酌婦ノ大正元年ヨリ十二年ニ至ル健康診斷成績ノ平均一、六五％ニ比シテ少ク大正十三年特ニ調査シタル酌婦ノ花柳病八、六六％ニ比シ著シク少シ。

六五、群馬縣娼妓梅毒檢査表

年次	檢査延人員	患者	百分比	備考
明治十五年六月	三八、七三四	六八三	一、七六	伊香保ハ十六年六月限リ廢止
同十六年七月	三五、九三五	四〇二	一、一三	
同十七年六月	二八、九三〇	三〇〇	一、〇四	
同十八年七月	二一、〇五一	九四	〇、七八	
同十八年十二月	一七、九〇一	一八六	〇、九八	
同十九年	一七、九三六	一四四	〇、八〇	
同二十年	八、一七七	一三三	一、九四	
同二十一年	九、五六一	一三四	一、四〇	
同二十二年	一五、二六六	三八五	二、二	新町、安中、妙義ハ二十三年九月限リ廢止
同二十三年	一八、二四〇	四八八	二、〇六	
同二十四年	一五、二六六	四〇三	二、七七	
同二十五年	一七、七四〇	二七〇	一、五三	
合計	二四一、四八一	三、六七〇		

六六、自明治十五年七月至同二十五年十二月　群馬縣娼妓梅毒檢査表

所在地名	檢査延人員	患者	百分比	備考
倉賀野	三〇、五六三	四二九	一、三五	明治十六年六月限リ廢止
伊香保	一、〇六三	二四	二、二五	
玉村町	三〇、九六二	三四四	三、〇五	
板鼻驛	三三、三一一	四〇一	一、八〇	
安中驛	一五、〇一〇	二〇〇	一、三三	明治二十三年九月限リ廢止
坂本驛	一〇、二〇〇	二九	二、三五	
一ノ宮町	二六、一〇二	五三二	二、一四	
妙義町	七、一三七	一二三	一、六八	明治二十三年九月限リ廢止
新町	一七、七五五	二四〇	一、三五	明治二十三年九月限リ廢止
木崎	五一、二六五	六五五	一、三〇	
川俣村	一七、〇一九	一八七	一、一〇	
全管	二四一、四八二	一、六四〇	一、三三	

第二節　乙種料理店酌婦ノ花柳病

此ニ乙種料理店ト稱スルハ他府縣ノ貸座敷ニ相當スヘキモノニテ從ツテ其酌婦ハ娼妓ニ代ルヘキモノナリ、已ニ述ヘタル如ク群馬縣ニテハ明治二十六年限リ公娼ヲ廢止シタルモ公娼ニ代ルヘキ乙種料理店ノ酌婦ト云ヘル特種ノモノヲ認メサルヲ得サリシナリ之レハ恰モ公衆便所ヲ廢シテ下水溝ノ代用ヲ默認シタルト同樣ノ結果ナリ從ツテ下水溝ニ對シテ應急ノ處置ヲ施ササレハ臭氣ヲ發スルニ至ル、即チ乙種料理店ノ酌婦ニ自衛的健康診斷ヲ行ハシムルニ至レリ高崎市ハ明治三十八年九月ヨリ開始シ前橋市ハ明治四十二年十一月ヨリ開始シ大正元年遂ニ全縣下ノ乙種料理店酌婦ニ對シ各地營業者組合ヲシテ所轄警察官署ノ指定シタル醫師ヲシテ毎月三回以上健康診斷ヲ施行セシムルコトトナシタリ

高崎市ハ檢診開始ノ明治三十八年ニハ檢診回數モ僅カニ二回ニシテ患者モ一六、二六%ノ多數ヲ出シ居リシガ漸次診斷ノ度ヲ重スルニ隨テ患者數モ減少シテ四十三年ニハ二、二三%トナリタリ當時前橋市ハ一、九〇%ノ患者ニ止リタリ。

六七、前橋、高崎乙種料理店酌婦花柳病患者表

年次	高崎市	前橋市
明治三十八年	一六、六二	
同三十九年	六、六二	
同四十年	三、九四	

年次	花柳病患者百分比	
	高崎市	前橋市
同四十一年	三、六八	一、九六
同四十二年	三、九五	一、九〇
同四十三年	二、三三	
平均		

明治四十年特ニ提出セシメタル健康診斷成績

明治四十年六月ヨリ八月ノ間ニ於テ各警察署長ニ命シ酌婦ヨリ健康診斷成績ヲ徵シタル結果ニ依レハ當時ノ酌婦數七百九十二人花柳病患者百三十四人一六、九%ニ上リ前記高崎市及前橋市ノ成績ト著シキ相違アルハ特ニ注目スヘク其頃未タ檢診制度ナキ酌婦ニ多數ノ花柳病患者アルヲ知リ又當時ノ高崎前橋ノ健康診斷カ粗漏又ハ寛大ニ流レ居リタルニハアラスヤトノ感モナキニアラス。

（第六十七表、第六十八表及卷末附錄第二十七表參照）

六八、明治四十年健康診斷成績ヲ徵シタルモノ

酌婦數	花柳病患者	百分比
七九二	一三四	一六、九一九

大正元年群馬縣下各地ノ乙種料理店組合ニ於テ酌婦ノ健康診斷開始後大正十二年迄ノ成績ハ第六十九表ノ如ク檢診人員十五萬八千七百四十五人花柳病患者ハ五千九百二十七人ニシテ一、六五%ナリ。

六九、大正元年群馬縣下一般ニ檢診開始後ノ成績

年次	檢診延人員	花柳病患者數					百分比
		梅毒	軟性下疳	淋病	計		
大正元年	八、四五三	一三八	一一	三一〇	四六九		五、五五
同二年	三〇、〇〇一	一四一	二九七	三三〇	七六八		二、五四
同三年	三〇、〇一二	六八	一九六	一九一	四五五		一、五三
同四年	二九、六二一	六〇	一三三	二三五	四〇六		一、三七
同五年	二九、六〇二	一五一	一四五	二三九	四二五		一、四四
同六年	三〇、九二四	一五七	一七七	二六五	四八五		一、五七
同七年	三一、二三六	一七二	二〇二	二四〇	五一三		一、五七
同八年	三四、二三〇	一三九	二二九	二九一	五四九		一、六〇
同九年	三三、一三二	一四七	二八三	二六六	四九六		一、四〇
同十年	三三、三四〇	一〇七	二六一	一九四	四六三		一、三八
同十一年	三三、一五一	一三一	一七四	一六三	四六八		一、四一
同十二年	三三、一六一	一三九	一三七	一五五	四四一		一、三三
合計	三六八、三四五	一、五二九	二、一〇九	二、二八九	五、九二七		一、六五
檢診人員ニ對スル百分比	—	〇、四二五	〇、五八八	〇、六二八	—		—

此成績ニ見ルトキハ健康診斷開始ノ大正元年ニ於テハ五、五五%ト云フ最多數ノ患者ヲ出シ大正二年ニ於テハ其半數以下ナル二、五五%ニ減シ其後殆ント年ト共ニ減少シ大正十二年ニ於テハ一、三三%トナレリ之レ極メテ順潮ナル好成績ノ如クナルモ一面ニ於テ考フルトキハ制度開始ノ當初ニ於テハ其執行嚴重ニシテ馴ルヽニ從ヒ寛ニ大ニ流レタニアラスヤトモ思ハルヽ點ナキニアラス何トナレハ近年ニ於ケル健康診斷ノ成績ハ花柳病患者一、五%内外ナルニ係ハラス大正十三年十月縣下各檢診嘱託醫ヲシテ特ニ檢診成績ヲ報告セシメタルニ八、六六%ノ患者ヲ出シテ居レリ此檢診ニ於テハ平素ノ檢診ト異リタル緊張ヲ以テ執行シタルコトカ窺ハルル故ナリ其檢診成績ハ第七十表ノ如シ。

七〇、群馬縣下酌婦健康診斷成績（大正十三年十月特ニ徴シタルモノ）

	受診者中ノ花柳病								
	現在數	受診者數	梅毒	子宮淋	尿道淋	子宮及尿道淋併有	軟性下疳	計	
	人	人							%
受診者ニ對スル各病百分比	一	一	一一二	四六九	〇、四四	〇、三六	一、一〇	七三	八、三六

五、二九%

第三節　群馬縣下密賣淫婦ノ花柳病

群馬縣下ニ於テ明治三十四年ヨリ大正七年ニ至ル十八ケ年間ニ密賣淫行爲ノタメ檢舉セラレタルモノ七百三十名中花柳病ヲ有スル者百三十一名一九、三二%ニ相當セリ之ヲ各年ニ觀ルトキハ大正二年三年ノ有毒者皆無ヨリ大正六年ノ四五、四五%ヲ最多トセリ而シテ其檢舉數ニ於テ近年著シク減少セルコトハ花柳病豫防上注意ヲ要スル點ニアラサルカ。

七一、群馬縣密賣淫人員累年比較（檢舉セシモノ）同縣警察統計

年次	密賣淫人員	有毒者	%
明治三十四年	六二	一九	三〇、六五
同三十五年	九一	一〇	一〇、九九
同三十六年	八七	一八	二〇、六九
同三十七年	九八	一六	一六、三三
同三十八年	五四	一九	三五、一九
同三十九年	六七	一一	一六、四二
同四十年	三四	五	一四、七一
同四十一年	四四	六	一三、六四
同四十二年	五七	一四	二四、五六
同四十三年	三七	六	一六、四四
同四十四年	二五	三	一二、〇〇
同四十五年	一六	二	一二、五〇

年次	密賣淫人員	有毒者	%
大正二年	八		
同三年	七		
同四年	九	一	一一、一一
同五年	一六	五	三一、二五
同六年	一一	五	四五、四五
同七年	七	一	一四、二九
合計	七三〇	一四一	一九、三二

第四節　群馬縣下藝妓ノ花柳病

藝妓ニ對シテハ酌婦ト同樣自衛團體ノ一定ノ囑託醫ニ依リ毎月一回乃至二回健康診斷ヲ行ヒツヽアリ大正二年ヨリ大正十二年ニ至ル十一ケ年間ノ成績ハ檢診人員十萬八千〇四十七名花柳病患者七百八十名ニシテ〇、七二%ニ相當セリ而シテ近年ニ於テハ大正二、三年頃ノ二分一乃至三分ノ一ニ減少セリ如斯患者ノ少數ナル果シテ事實如何疑ヒナキ能ハサル處ナリ罹病者ハ檢診當日以外ニ診療ヲ受ケ檢診當日ノ統計ニ上ラサルモノ少カラサル事情アリト聞ケリ之等ノ事情等ニ依リ統計上ノ患者ハ少數ナルニアラサルカ私カ大正十三年十月檢診醫ヲシテ特ニ檢診成績ヲ報告セシメタルニ檢診人員九百十名患者六十二名ニシテ其割合六、八一%ニ當リ平素ノ檢診成績ニ比シ約十倍ノ患者ヲ出セリ（第七十二表及第七十三表參照）

七二、群馬縣藝妓健康診斷成績　其一

年次	檢診人員	花柳病 梅毒	軟性下疳	淋病	計	%
大正二年	六、〇一八	二六	一〇	四七	八三	一、三八
同三年	六、二〇〇	一八	六	二四	四八	〇、七六
同四年	六、八七七	一四	六	二五	四五	〇、六六
同五年	七、五四八	二五	七	二六	五八	〇、七七
同六年	七、九七四	二〇	八	二八	五六	〇、七〇
同七年	八、六九一	一六	七	二	四四	〇、五一
同八年	一一、一九〇	二五	一六	二六	一〇七	〇、九二
同九年	一三、三八三	四六	一九	三五	一一七	〇、九四
同十年	一三、一〇三	四五	三	二四	一〇一	〇、七七
同十一年	一三、六九九	二三	一六	二八	六七	〇、四九
同十二年	一三、八五五	一四	一五	二五	五四	〇、三九
計	一〇八、〇四七	二三二	一四二	二六五	七八〇	〇、七二
檢診人員ニ對スル各病%	—	〇、二五	〇、一三	〇、二四	—	—

	受診者數	受診者ノ內有毒者							受診者ニ對スル各病ノ比 %
		梅毒	子宮淋	尿道淋	子宮淋尿道淋併有	軟性下疳	計	%	
	九一〇	五	四五	五	四	三	三	六、八一	五、九三
		〇、五五	四、九五	〇、五五	〇、四四	〇、三三			

第五節　群馬縣賣笑婦花柳病ト他府縣トノ比較

以上群馬縣ニ於ケル舊時代ノ娼妓及現代ニ於ケル乙種料理店ノ酌婦（他府縣ノ妓樓娼妓ニ相當スヘキモノ）並ニ藝妓ノ花柳病ヲ綜合シ之ヲ他府縣ノモノト比較考察スレハ左ノ如シ。

七四、群馬縣下賣笑婦花柳病ト他府縣トノ比較

種別	群馬縣 %	全國 %	備考
娼妓	一、五二	二、〇〇	群馬縣ハ明治十五年ヨリ同二十五年迄ノ娼妓健康診斷全國ハ大正三年ヨリ同十二年
乙種料理店酌婦	一、六五	—	自大正三年至同十二年　普通定期診斷ニ依ルモノ
同	八、六六	—	大正十三年十月　普通定期診斷ニ對シ豫メ診斷成績ヲ提出スベキヲ命シタルモノ
酌婦	一九、三二	二、九四	大正三年ヨリ同十二年
賣淫婦	〇、七二	二二、一八	群馬縣ハ明治三十四年ヨリ大正七年、全國ハ大正八年、九年、十年、十二年、及其他ノ數府縣
藝妓	六、八一	三、一四	群馬縣ハ大正二年ヨリ同十二年迄ノ成績全國ハ大正三年ヨリ同十二年
同	—	—	大正十三年十月特ニ檢診成績ヲ徵シタモノ

前表ニ依レハ群馬縣ニ於テモ密賣淫ニ花柳病最モ多ク一九、三二％ニシテ乙種料理店酌婦ノ八、六六％藝妓ノ六、八一％順次之ニ次キ娼妓ハ年代古キモ最モ少キカ如シ之等平素ノ定期健康診斷成績ニ徵スレハ乙種料理店ノ酌婦ハ常ニ藝妓ニ比シ二倍强ノ花柳病患者ヲ有スルカ如シ、之カ全國トノ比較ニ就テ述フレハ群馬縣ノ乙種料理店酌婦ノ花柳病ハ定期診斷ノ成績ニ於テハ全國ノ娼妓及酌婦ノ定期診斷ニ比シ少數ナレトモ大正十三年十月ノ檢診ニ於テハ約三倍弱乃至四倍ノ多數ナリ藝妓ニ於テモ同樣ノ關係ニアリテ定期診斷ニ於テハ群馬縣ニ比シ全國平均ハ四倍强ノ患者ナリト雖モ大正十三年十月特ニ健康診斷ノ成績ヲ徵シタル際ニ於ケル群馬縣ノ成績ハ全國平均ノ二倍强ノ患者ヲ出セリ之ニ依ツテ觀ルハ群馬縣接客業婦ノ花柳病ハ平素ノ定期健康診斷ノ成績ニ於ケル如ク少數ニハアラサルヘク殊ニ群馬縣ニ於ケル之等健康診斷ノ實狀ヲ見ルニ其諸般ノ設備診斷ノ方法診斷技術等ニ多クノ遺憾ヲ認ムル點ヨリ考フルトキハ平素ノ健康診斷ノ成績ニ對シ考慮ヲ費スノ必要アルヘシ。

第二章　群馬縣下一般人、壯丁、陸軍兵ノ花柳病

第一節　群馬縣下一般人ノ花柳病及他府縣トノ比較

群馬縣下ニ於ケル一般人ノ花柳病患者ニ付テハ已ニ一般人ノ花柳病ノ部ニ於テ述ヘタルカ如ク古キ統計ニ於テハ明治二十八年ヨリ三十七年ニ至ル十ケ年間ニ於ケル同縣下開業醫ノ診療ニ係ルモノアリ之レハ同縣下開業醫ヨリ其取扱患者ヲ半年報トシテ屆出シメタルモノニシテ人口ニ對シ〇、四二一%ナリ次ハ明治三十九年中醫師三百五十三名ノ診療ニ係ル花柳病患者ハ人口ニ對シ〇、六二四%ナリシ但當時同縣下ニ於ケル開業醫師ノ全數ハ不明ナルモ三百五十三名ハ恐ラク同縣下開業醫ノ全數ニ近キモノナラムトハ現在ノ醫師數ヨリ推定ヲ下シ得ベシ。更ニ大正三年中縣下開業醫ノ取扱ヒタル花柳病患者ヲ各警察官署ヲ通シテ調査シタル成績ハ一、一九五%ニシテ最近ニ於テハ昨大正十三年十月中私カ群馬縣下ノ開業醫ニ依囑シ大正十二年中ニ診療セル患者ヲ調査セル成績ハ申告醫師四百五十七名ニシテ當時獨立開業ノ醫師全部ヲ網羅シタルモノニシテ患者ハ人口ニ對シ一、六二八%ナリキ之等ノ統計ハ元ヨリ絶對ニ正確ナルモノトハ信セサルモ大概ヲ推測スルニ足ル資料タルヘシト信ス殊ニ昨年ノ調査ニ於テ同縣下全部ノ開業醫ヨリ報告ヲ得タルコトト何レモ眞面目ナル報告ナリシコトハ極メテ貴重ナル統計ナリト信ス。而シテ之等ヲ第七十五表ニ掲ケ觀察スルニ漸次花柳病率ノ增加セルヲ見ルハ偶然ニアラスシテ眞ニ花柳病蔓延ノ趨勢ヲ語ルモノニアラサルナキヤ。

七五、群馬縣一般人花柳病表

年次	人口	花柳病 梅毒	花柳病 軟性下疳	花柳病 淋病	花柳病 計	%
自明治二十八年至同三十七年	九三三、二六五	一	四三	一、五六八	五、八二三	〇、四二一
明治三十九年	一〇二、六九八	三、八四二	二、六八五	五、二二四	一三、三四四	〇、六二四
大正三年	一〇九、五〇〇	四、三四五	二、九四一	八、二三三	一八、五四五	一、一九五
同十二年	一二三、四六二	七、三三〇	六、一四九	一五、〇〇五	二七、七二三	一、六二八
計		實數 一八、五四五				
人口對百分比	—	〇、三〇八	〇、一〇一	〇、四九〇	一、一九九	—

右ノ內最近ニ於ケル二例即チ大正三年及十二年ノ花柳病各病ノ人口ニ對スル比ヲ掲クレハ左表ノ如シ（詳細ハ卷末附表參照）

七六、群馬縣一般人花柳病各病ノ比

年次	兩年ノ人口	人口ニ對スル花柳病百分比 梅毒	軟性下疳	淋病	計
大正三年及同十二年	二二九、一九八	〇、三五〇	〇、二六九	〇、二六三	一、四五一

群馬縣一般人花柳病ト他府縣トノ比較

以上大正三年及十二年ノ調査ニ係ル一般人ノ花柳病患者ノ實數ヲ同年代即チ大正三年以降ニ於ケル山形縣外十縣ノ花柳病患者ト比較スルニ群馬縣ニ於テハ兩年ノ花柳病患者實數三萬〇百九十八、兩年合計人口二百十二萬九千百九十八人ニ對シ一、四一八%ニシテ他十縣ノ各年度合計ニ於テハ患者二十七萬一千〇十人ニシテ人口二千六百四十一萬二千七百〇六人ニ對シ一、〇二六%ニシテ群馬縣ノ方〇、四二五%多數ナリ調査ノ方法其他ノ條件同一ナラサレハ此統計ヲ絶對的ノモノトハ信セサルモ一派ノ人ノ言フ如ク群馬縣ハ特ニ花柳病少シトノ說ハ信スルニ足ラサルナリ。

七七、群馬縣一般人ノ花柳病ト他府縣トノ比較表

區別	人口合計	花柳病患者	百分比	備考
群馬縣 大正三年及同十三年	三三九、一九八	三〇、一九〇	一、四一八	七六表ノ一、四五一%ニ二病併有者各病ヲ一人ト數ヘタルニ依ル本表ハ實數ニ依ル
山形縣外八縣	三六、四二、七〇六	三四、〇一〇	一、〇二六	山形、石川、岩手、福井、愛媛、青森、鹿兒島、愛知、佐賀、秋田、山口

第二節　群馬縣壯丁花柳病ト全國壯丁花柳病トノ比較

群馬縣ニ公娼ナキカ故ニ花柳病少シ壯丁花柳病ノ少キハ之ヲ立證スルモノナリトハ或一派ノ人達ノ常ニ引證主張スル處ナリ而シテ花柳病ノ豫防カ之等一派ノ人達ノ唱フル如ク簡單ニ片付クモノナレハ吾々ハ最早夢フルニ足ラスト思料スヘキモ果シテ群馬縣ハ壯丁花柳病他ノ存娼縣ニ比シ少キヤ若シ少シトセハ廢娼ノ結果ナルヤ又ハ他ニ理由ナキヤ講究ヲ要スル問題ナリトス今此ニ大正元年ヨリ同十二年ニ至ル十二ケ年間ノ全國各府縣壯丁花柳病ヲ比較觀察スルニ十二年間壯丁平均花柳病ハ一二、〇九%同年間群馬縣壯丁平均花柳病ハ一五、六〇%ニシテ全國壯丁ノ平均ニ比シ遙カニ少キコトハ事實ナリ、サレトモ群馬縣ヨリ尙ホ少キモノ九縣アリ第七十八表ニ示スカ如ク之等ヲ少キモノヨリ順次列擧スレハ宮城、埼玉、山梨、新潟、長野、山形、青森、岩手、和歌山、群馬縣ノ順序ニシテ群馬縣ハ第十位ニアリ而シテ他ノ九縣ハ何レモ存娼縣ナリ。之レニ依テ壯丁花柳病カ全國平均ヨリ少キ縣ハ獨リ群馬縣ノミテハナク他ノ存娼縣ニモ群馬縣ヨリモ壯丁花柳病ノ少キ縣アル故ニ群馬縣ハ公娼無キ故ニ壯丁花柳病ハ少シトハ何等理由ナキコトニシテ群馬縣壯丁花柳病ノ少キハ他ニ理由アリ。

七八、全國平均ヨリ少キ府縣ノ序列（自大正元年至同十二年壯丁花柳病）

花柳病少キ順位	府縣名	十二ケ年間平均花柳病千分比少キモノヨリ	人口ニ對スル公娼數ノ少キ縣ノ順序	花柳病少キ順位ノ番號	人口萬ニ對スル娼妓數（少キモノヨリ）
一	宮城	一、三三	群馬	一〇	〇
二	埼玉	一、六四	埼玉	二	〇、八二